

広島市の小・中・高校生及び教師の言葉づかいについての意識に関する実態調査

—— 中学生の場合（中間報告） ——

財津 伸子

一 調査の動機

生徒の言語環境が多様化し、言葉にかかわる刺激と情報が氾濫している中で、言葉をより主体的に獲得していく生徒を育てたいと願っている。しかし、毎日の指導では、生徒の意識がどのようになっているのかを踏まえたものにはならず、教師自身の規範意識に照らして是非を言うのみの表層的な指導になつてしまいがちである。

そこで、生徒の、自分の使う言葉についての意識はどのようなにして形成され、現在どのような意識をもっているかを調査し、指導の基礎的な資料としたい。

本調査は、以上のような考えから、広島教育センターの教育研究の一環として広島市立学校の御協力をいただいて実施したものであり、その中間まとめの段階である。

二 調査の目的

言葉づかいについての児童生徒、教師の意識をとらえ、児童生徒の言葉づかいについての自覚を育てる指導の在り方を探るための基礎的資料とする。

三 調査の対象

○ 対象者と人数（表1）

表1 対象者と人数

校 種	学年	男子	女子	小計	合計
		(人)	(人)	(人)	
広島市立 小学校 児童	4年	149	112	261	592
	6年	151	180	331	
広島市立 中学校 生徒	1年	148	129	277	800
	2年	147	148	295	
	3年	132	96	228	
広島市立 高等学校 生徒	1年	113	142	255	524
	2年	86	183	269	
広島市立学校 教師		116	177		293
(小学校教師 189 中学校国語科教師 89) (高等学校国語科教師 21)					

回収率 小学生、中学生、高校生100%
教師88.7%

○ 対象者の選出 地域標本抽出法

四 調査期日 平成八年三月上旬

五 調査の内容

(一) 言葉づかいについての自覚の育成に関する基礎的考え
「言葉づかいについての自覚」とは自己の使う言葉につ

六 調査の結果

調査の結果を、中学生の言葉づかいについての意識に焦点をあてて分析・考察する。

(一) 言葉づかいについての自覚

言葉づかいについての自覚の有無を「自分の言葉づかいを変えたり直したりしたいと思うか」で問い、その自覚の現れを「言葉づかいは人柄の表れである」と言われることをどう思うか」と「言葉づかに気を付けて話すか」で問うた。

① 自覚の有無と様態

「自分の言葉づかいを変えたり直したりしたいと思う」は「よくある」「時々ある」を合わせると、中学校では51%でありほぼ半数であるが、他の校種より低い(図2)。

「どのように変えたいか」は「場や相手に合うよう考えた言い方に」が第1位で、第2位は「分かりやすい言い方」である。また、中学校では僅かではあるが「流行も取り入れた新しい言い方に」が他の校種に比べて高い(図3)。

② 自覚の現れ

「言葉づかいは人柄の表れ」については、「そうだと思う」「少しそうだと思う」を合わせると、中学校では74%であり、高等学校より低い。しかし「そうだと思う」「そうだと思う」は中学校が高等学校よりも高い(図4)。

また、「言葉づかに気を付けて話す」は「よくある」「時々ある」を合わせると、中学校で68%であり、これは

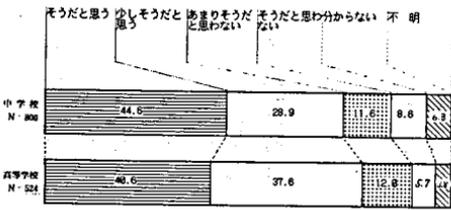


図4 「言葉づかいは人柄」をどう思うか (SA) 5カテゴリー

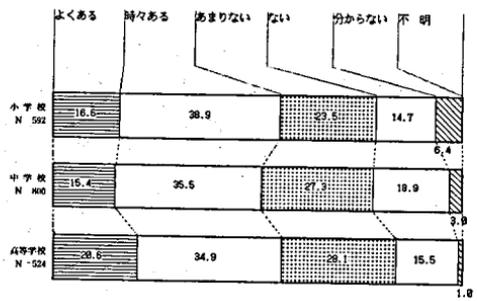


図2 言葉づかいを変えたいと思う (SA) 5カテゴリー

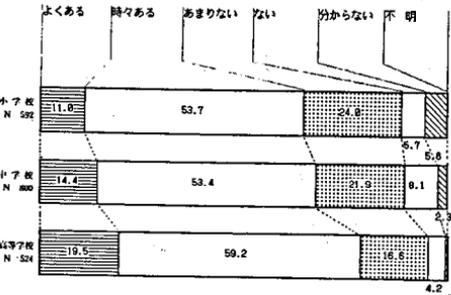


図5 言葉づかに気を付けて話す (SA) 5カテゴリー

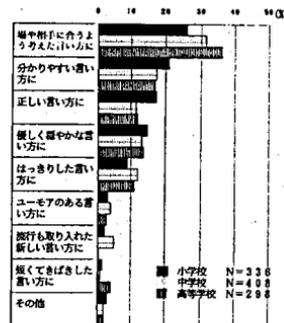


図3 どのように変えたいか

校種が上がるにしたがって高くなっている(図5)。

以上のことから中学生の言葉づかいについての自覚は他の校種に比べて総合的には低い状態にあると言える。ただ、他の校種に比べて中間の回答が少ないことから、自覚が高い者と低い者との差異が大きいたうかがえる。

志向する言葉づかいは「場や相手へふさわしい言い方」であり、このことは他の校種と共通している。

(二) 言葉づかいについての関心

関心の有無を「友だちの言葉づかいが気になるか」、関心をもつきっかけの頻度を「回りの人から言われるか」で問うた。

「友だちの言葉づかいが気になるか」は「よくある」「時々ある」を合わせて中学校では45%であり、小学校より低く、高等学校と同じ程度である。また、「ない」は中学校が最も高く19%である(図6)。

「回りの人から言われるか」は「よくある」「時々ある」を合わせて中学校では36%であり、小学校より低く高等学校と同じ程度である。また、「ない」「あまりない」が半数を占めている(図7)。

言葉づかいについて言われる人は、どの校種も親が第一位であり70%前後である。中・高等学校では次が友達、兄弟の順であり、小学校では兄弟、友達、親の順である。また、

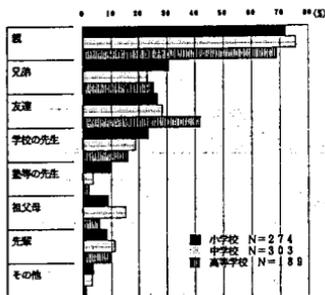


図8 誰から言われることが多いか



図9 どんなことについて言われるか

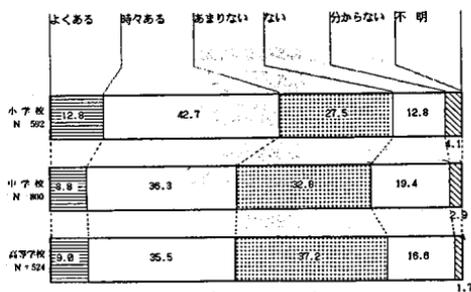


図6 友だちの言葉づかいが気になる (SA) 5カテゴリー

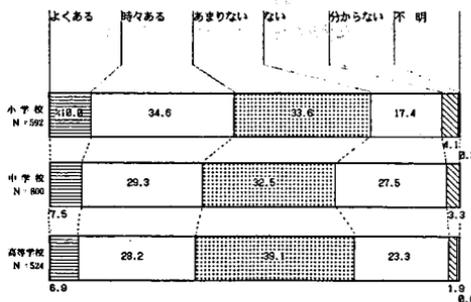


図7 回りの人から言われるか (SA) 5カテゴリー

中学校は祖父母が他の校種と比べて高い(図8)。

言われる内容は、中学校では「場や相手にふさわしいか」が第1位で約60%ある。続いて「正しいか」「明瞭か」「分かりやすいか」である(図9)。

以上の結果から、中学校では言葉づかいについての関心をもつきっかけは多いとは言えず、関心も「もたない」者が半数を超え高くないことがわかる。ただ、親や兄弟、祖父母など家族から言われることは他の校種に比べて高く、家族からの働きかけが多いことがわかる。さらに、言われる内容からは、言葉づかいについての中学生の志向との関連がうかがえる。

(三) 言葉づかいの模範(モデル)

モデルについて、意識を「モデルがいるか」で問い、行動を「他の人の言葉づかいをまねるか」で問うた。

モデルが「いる」が27%で、校種が上がるにしたがって低くなっている。また、52%が「いない」と答えている(図10)。

モデルは、「友達」が第1位で45%であり他の校種に比べて高い。次が「スター・タレント・アナウンサー」である(図11)。モデルの言葉づかいの好きなのは、中学校は「場や相手に合うように考えているところ」が第1位であり、小学校は「おもしろいところ」、高等学校は

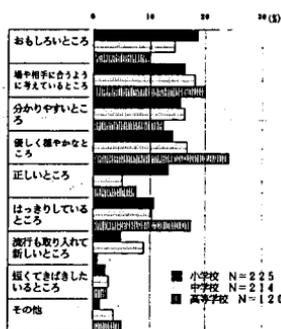


図12 モデルの言葉づかいのどこが好きか

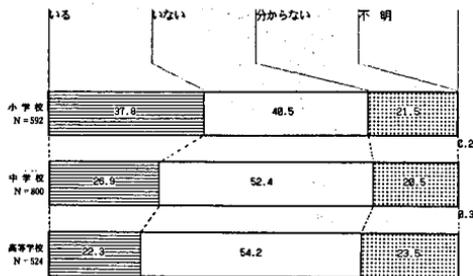


図10 言葉づかいのモデルがいるか (SA) 5カテゴリー

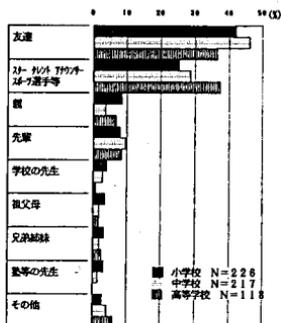


図11 モデルは誰か

④ 自覚の背景

言葉づかいについての自覚と言葉づかいについての関心、モデルの存在とのかかわりをとらえるために、クロス集計をした。

① 「自覚の現れ」×「モデルの有無」

モデルがいる生徒はモデルがいない生徒に比べて「言葉づかいを変えたい」と思う割合、「言葉づかいは人柄の表れ」を「そうだと思う」割合、「言葉づかいに気をつけて話す」割合が高い(図16、17、18)。

回りの人から言葉づかいについて言われる生徒は、言われることがあまりない生徒に比べて「言葉づかいを変えたい」と思う割合、「言葉づかいは人柄の表れ」を「そうだと思う」割合、「言葉づかいに気をつけて話す」割合が高い。しかし、回りの人から言葉づかいについて言われたことが「よくある」生徒は「時々ある」生徒に比べて「言葉づかいについて気をつけて話す」ことがやや低い(図19、20、21)。

以上の結果から、モデルがいることは、中学生の場合、言葉づかいについての自覚をもつことに結びついているということができる。

また、回りから言われることは、中学生の場合、言葉づかいについての自覚をもつことに結びついていくことが多いが、「よく言われる」場合には必ずしも直接的に効果があるとはいえないことがわかる。

図19 言葉づかいを変えたいと思う (SA) 5カテゴリ



図16 言葉づかいを変えたいと思う (SA) 5カテゴリ

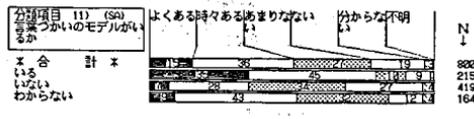


図20 「言葉づかいは人柄」をどう思う (SA) 5カテゴリ



図17 「言葉づかいは人柄」をどう思うか (SA) 5カテゴリ

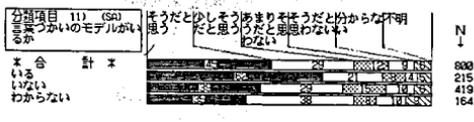
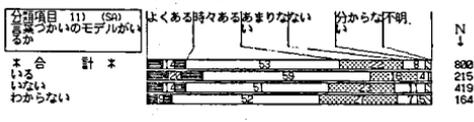


図21 言葉づかいに気をつけて話す (SA) 5カテゴリ



図18 言葉づかいに気をつけて話す (SA) 5カテゴリ



(五) 新語の情報源

言葉づかいについての情報源を「初めて知る言葉はどこから知るか」で問い、地域社会の言語とのかかわりを「好きな方言があるか」で問うた。

「初めて知る言葉はどこから知るか」については、中学校では「友達との話」が第1位で33%、「テレビ・ラジオ」が第2位で32%であり、高等学校では「テレビ・ラジオ」が第1位、「友達との話」が第2位である。また、「家の人との話」「まんが本・雑誌」は中学校が高等学校よりも高く、「物語・小説・科学などの本」は高等学校が中学校よりも高い。教師は「テレビ・ラジオ」が第1位で44%であり、「書物」が第2位で31%である(図22)。

「いつも使う方言の中で好きな言葉があるか」については、どの校種とも好きな言葉が「ない」及び「わからない」が高く40%近くである。一方、好きな言葉が「ある」は、校種が上がるにしたがって高くなり中学校では16%である。教師は好きな言葉が「ある」が39%で生徒のほぼ2倍であるが、「わからない」は同じ程度である。「いつも使う方言の中で好きな言葉」(自由記述)として、中学校では大阪弁や関西弁を上げたものが多く、広島弁からは「じゃけん」(この語は調査の期日の頃にテレビのコマーシャルで使われていた)を上げたものが最も多かった(図23)。

以上の結果から、言葉づかいについての情報源として、

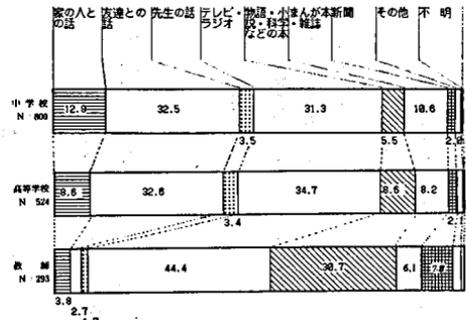


図22 初めて知る言葉はどこから知るか (SA) 5カテゴリー

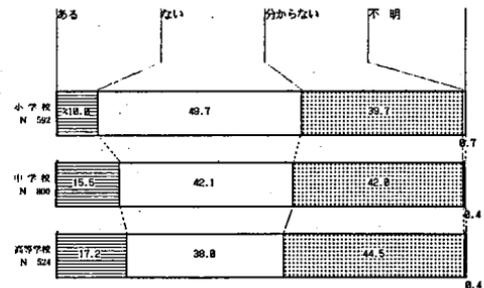


図23 好きな方言がある (SA) 3カテゴリー

中学校では家の人や友達など身近な人との話が高等学校に比べて大きな役割をもっていることがうかがえる。

また、マスメディアの中で特にテレビ・ラジオはどの年齢層においても情報源として大きな位置を占めており、生徒教師とも文字言語より音声言語からの情報を多く収集していることがわかる。

さらに、地域の方言に対しては、児童生徒・教師とも広島弁を身近な方言として意識することが少なく、方言についてもテレビ等の情報により間接的に触れることが多いことがうかがえる。成長するにしたがって好きな方言を見いだす傾向はあるが、関心の低い者の割合は変わらない。

(六) 言語感覚

言語感覚の偏りをとらえるために、正誤感は「食べられる(ら抜き言葉)」「行けれる(二重可能)」をどのように感じるか、適否感は「犬に餌をあげています(過剰な丁寧)」「ちょーおもしろかったね(流行語)」「私は反対したいみたいな(流行語)」をどのように感じるかを3段階で問うた。また美醜感は短縮語、強調語を使うかどうかで問うた。

① 正誤感、適否感

正誤感、適否感はそれぞれの語についてどのように感じるかを3段階で尋ね、回答を「普通」1点「少しおかしい」2点「おかしい」3点として平均値を出し、偏りの傾向をみた(図24、25)。

児童生徒の感じ方と教師の感じ方とは、全体的には感じ方の傾向はにているが、児童生徒は教師に比べて「普通」と感じる方へ寄っている。

「食べられる(ら抜き言葉)」は高等学校、中学校、小学校の順で「普通」と感じている。

「行けれる(二重可能)」と「犬に餌をあげています(過剰な丁寧)」は児童生徒の感じ方と教師の感じ方の開きが大きい。

中学校は正誤感では教師に近づいた感じ方をしている。しかし、適否感では、丁寧語については男女とも教師の感じ方との差異は大きく、流行語については中学校女子が、他の校種に比べて教師との差異が最も大きい。

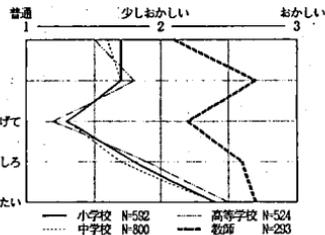


図24 どのように感じるか

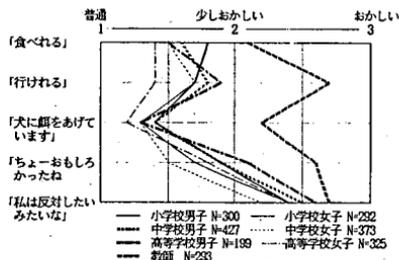


図25 どのように感じるか(校種・男女の違い)

以上の結果から中学生は他の校種に比べて正誤感についての偏りは大きくないが、適否感については、特に流行語について受け入れやすい偏りがあることがうかがえる。

② 美醜感

美醜感の偏りをとらえるために、「自転車」「ゲームセンター」「朝一番で」についての元の語と短縮語のどちらを使うか、「おいしい」「すごい」「本気に」について元の語と語気を強調した語のどちらを使うかを問うた(紙幅の都合でそれぞれ一語句の集計を示す。図26、27)。

短縮語については、どの語句についても校種が上がるに

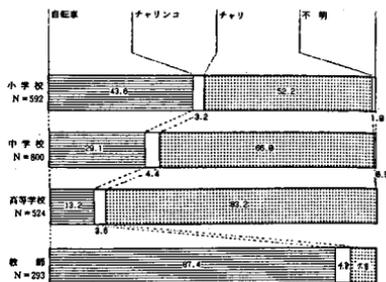


図26 どちらを多く使うか (自転車) (SA) 3カテゴリー

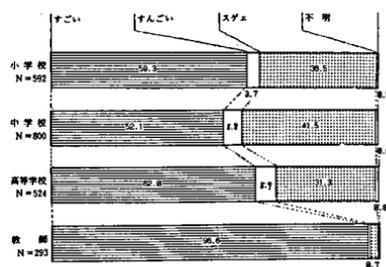


図27 どちらを多く使うか (すごい) (SA) 3カテゴリー

たがって短縮語を使う傾向がある。

また強調については、中学校が他の校種に比べて強調した語を使う割合が高い。

さらに、全体的に児童生徒の短縮語、強調した語の使用は教師に比べて大変高い。

以上の結果から、児童生徒は教師に比べて短くインパクトの強い言葉づかいをする傾向があり、中学校ではその傾向が他の校種に比べて強いといえる。このことは、「回りの人からいわれる」内容が、中学校では特に「場や相手へのふさわしさ」が高いことと関連していると思われる。

七 まとめ

中学生の「言葉づかいについての自覚」の形成について

① 調査結果から、次のことが明らかになった。
中学生は、小学生、高校生に比べて言葉づかいについての関心が低く、言葉づかいのモデルも少ない。また、言語感覚は適否感が低く、インパクトの強い短い言葉を選ぶ偏りをもっている。そのため、個人差は大きいですが、全体的には言葉についての自覚が低い状態であり、言葉の習得も偏りがあることがうかがわれる (図28)。

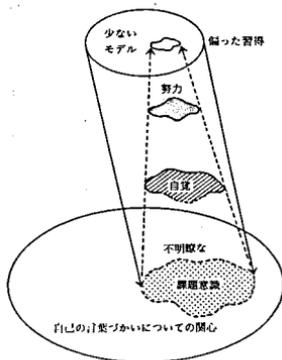


図28 中学生の言葉づかいの習慣

- ② 中学生では、言葉づかいについてのモデルがいることと言葉づかいについて言われることは、「言葉づかいについての自覚」を育てるために有効である。
- ③ 中学生では、家族や友達等の身近な人が「言葉づかいについての自覚」を育てる上で影響力をもっている。
- ④ 中学生では、言語感覚のうち適否感、美醜感を特に涵養していくことが、「言葉づかいについての自覚」を育てる上で大切である。

(広島市立安佐中学校)